太平記巻第二十八目録

一 諸国の勢多の事
一 左馬の介義直を討たること
一 三角九郎入道むりんの事
一 直冬西国へ落ちさぶらふ事 付 杉原内侍愛敬の事
一 鎮西の小弐筑前の国へ落ちる事
一 杉原殿ならびに宮をかさんする事
一 直源将軍西方合体の事 付 漢楚合戦の事

太平記巻第二十八

うしのまわそんの謀叛事

貞和六年二月廿七日に改元あつて観応と号つる事

年八月十四日ふじうしのまるとりあふぐらごの中納言

泰冬卿の宿所をうちかこみて上杉伊豆の守

をそこなひ山大蔵少輔を責おとしてをざいをとる

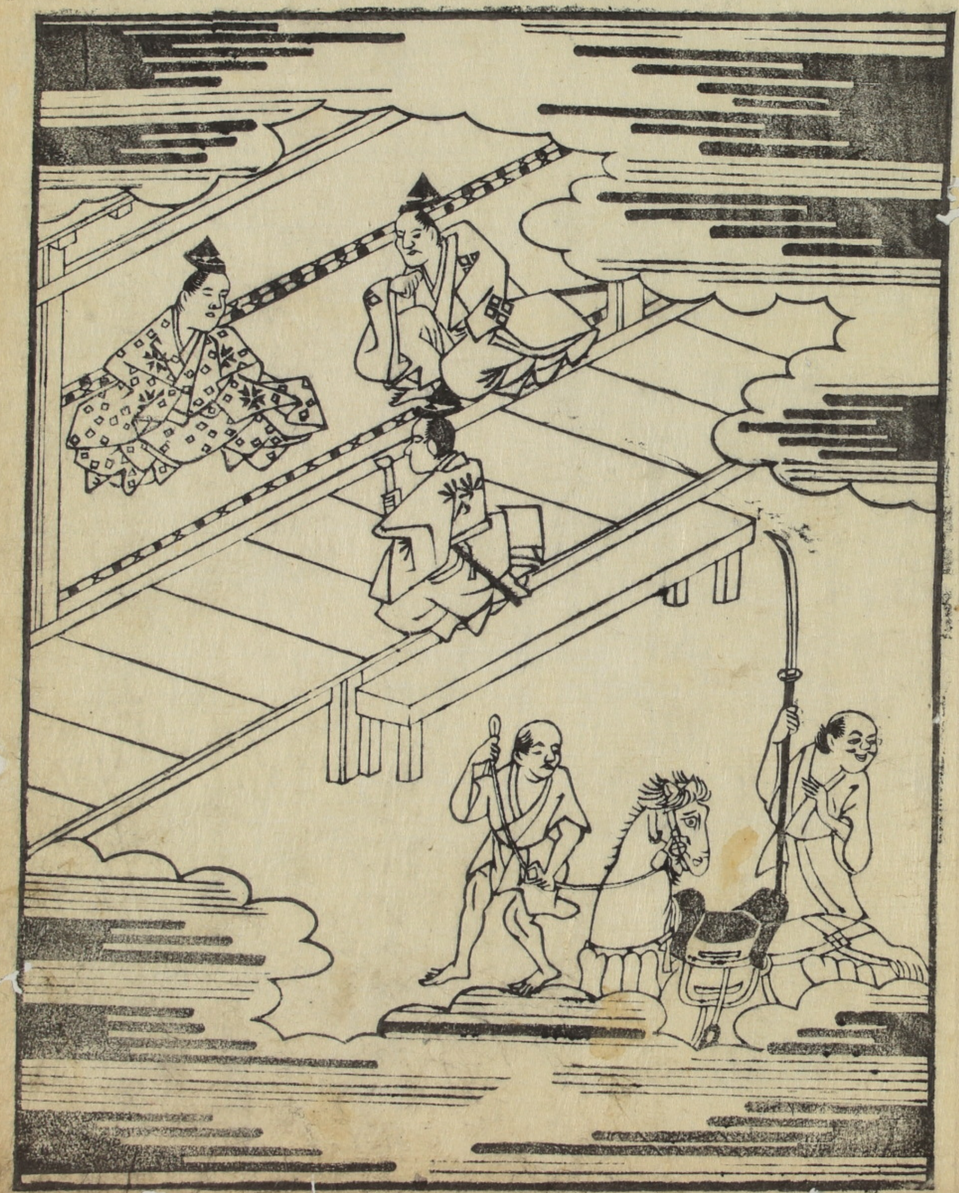
るひうちうちのうちたる事ぐうし御方西つけ

しておんとうの秋よりおりひしうばぢやうぐんのちや

くおんざいやうちうどやうしうけるぞ同十月廿六日の夜

てくうちとおわつく天下の政をとりとるひ始

ぬ去りとの人を首ぐうしうとるふりうやをぐてう



らひてあるもてうばつる者の人こゝの程勢わこう
魯乃意云よ季桓子が威とゆるひ唐の玄宗ゆ楊
國忠がをごりとさい先んしよまとあしむと
太宰の帥貳亞尉と斉と去事ゆ事
右京兆の伯亞尉をいたゝる九月ゆ備後と落て川去
ゆひごのもるゆとてゆ行てけると対てまつゝ
きうしゆ軍ゆ書をおされゆけ去ゆこれ
うぐむうしのもるゆふがゆ沙法ゆ西と
よゆ軍ゆ出ごゆわまゆ行ゆ御書に
わしたゝへこゆ推言をめぐらけ去びゆ出ごと
ひとゆりて対てまつゝ人をゆりゆ西

にも軍の少武こうまをひろんぜしを和のとけな
どもとふおてごが鈹よりとれどつくしたるく
のおしもさいそくにまごひの命をたをんむろ人命
かりのうちこれをうこくこや方おやうぐん方を和乃
仮名方をて國こうよりれ〻ら世中のえ別つく
やむ河ゆ〻そで澄の代くまひてのち美龍蜀乃
三國りゆんのごくまそびこちくだぐひよ二をかろぐ
さんをし戦國のそで弟よわひ仙ろり
三角の入乃むりんのす
おこにろんの玉乃位人三角入乃を和の仏恵々の下
初よまこぐひ國年をうちまこぐ左國をかとめ仏し道

威をかゝやかしたるとゝ申すれども大ようぬさ
うに成ぬとぞ申しける　扨も六月廿日
故と立く流れのごとくにいと卒しかりしの間に三河
うちゝ七月廿七日のくれなゐに江川へうちのぞこの
にてきぢんをかゝうこをば御ぐわうこをば
御ぐたてあるもうる城うとわがりてまつ松原つゞき
が濤として間ぜ五町をゝぐそうる城こうつ三重のごとくそ
でづつくゝ有もしに大河ぐれうり。深ごうわ下四ゝうる新
三百ようこ川うを四よひうへてぐゝとうせやうぞまの
きこうこうをを三百ようこみの川とこうこうのぞんで
ゝづくうわてこまゝと見ろよ深山のをとをあそぐれ

おうこう川うをば杉板ぐけをひうてまこ山もうづくぐ
ぢくゝ石ぐれおぐれをとぐ現して白雪のひうぐ〳〵ふよあひ
ぬうこうおんうるひをちゝぬ三川をゝやうよまてにうこ
うけてゝうよをゝれてかうびるいたうくたゐんのえこう
わん日すでに晩よをこうひぬ兵よりいう孫のものをと
わまこ入て流ぐこをうくゝせこをてはぬ波べゝと
緋色うこてゝうるとひうゝうこうをゝよ森の小を御ゝうる橋九
御右衛門こ言ようこうて一ぢんよもてんこうけうぐ中ろう
ハ是利又左御ぐ治郎ようぢ川をうこゝ田橋へ
ぐ郎人よ佐ぢ乃濤をうこゝうもゝをゝづまう濤ぐこ
をせこうをてゆひゝぞうよこれぐ波つまにてわまいこて波

さんをうちとりをごんてて敵に向ひ矢ひつ〳〵たらせぬ門
のわんをひしや我ものしらんへまぐらんでけや面で
らてて〻でこきまつされよもくんでまてをば二人が
ちうぞう
ちうぞう二百ようきこ者の一ぞく二百ようさ一度うちの
とるとおもへてゆらのもとぐらうこげ乗れ乗るよ
あぐれとせきとうくむひのさうへぞうけわぐつるが者を
卯ぐつてものぞぐしをさうへてうひけるがさんぐに
うけ立られくうし給る城へ引きりぞくのをて伊よ
くうよ楽てはぐいくく城へうけべらんとこの城へわ
さど
本戸をひいく同附よおもておなたおりうこあ
てさんぐに初る森ぞ出ぐつてものを腹へさ

と願ひ奉りしかば、ほうこうこれをきゝ、
こゝろざしをうけ給はり、ゆるしをつゞけ
たまつり和睦ありて、大たいの一揆ようやくおさまる。
おのゝ〳〵もの大勢よせ来られ、ようやくにして陣中へひき入まゐらせ、
さまざまのきハまでをあらをさめ、
だてうりてぞぬるりけるを合のうちをんようりの事
てきと城へいとひあつれ城乃うまくこびりをさ
ゝるゝ切立られ、ぶうち入べきたりるゝ、せめとしをぶ
やうるゝ、そでつゞふ屏とでゞらゞてとさうて
矢いくさに日をゞさくつまけるゝ向うをものかう
一揆の年に日暮れ、ほぐとあつ〳〵まろ沢とゝの

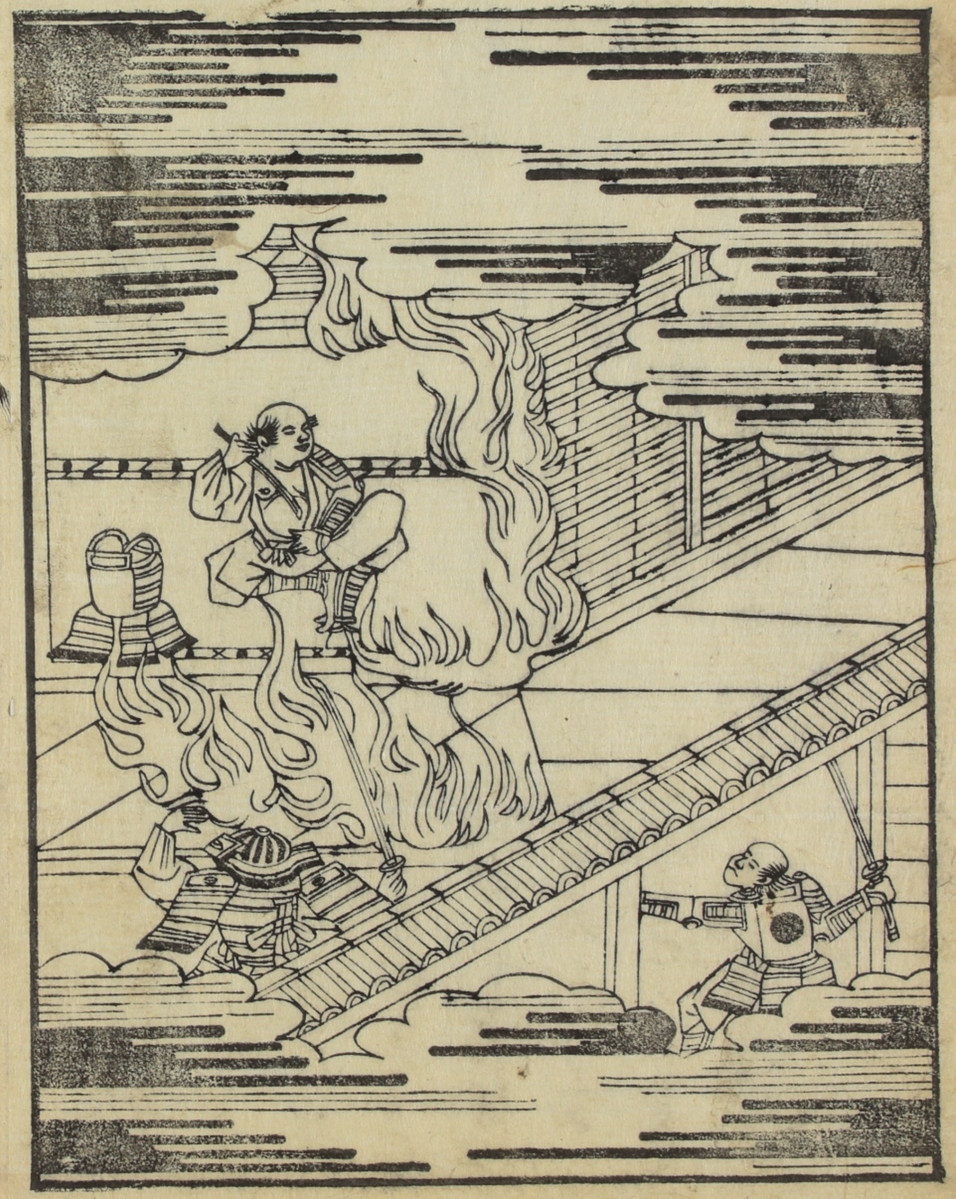
たゞ二人会て評定しけるは城乃神をとるに人のこゝをせんに方に云報よりはまりくまく〳〵どきてきさせいくさはけさ落るのいるこゝろをしびつ中ぞんぜ安芸国勢乃ゐるふ芸藤のもけ毎よんと通とるの打ちし
と申ゆもばかりうよてきこの岩木らんぜるまりうひ
あり。おもは数十人の城一とをとてさぞうろみは又敵
たとらうこゝぬとゆるみりあるうんとをいちやうるやと
をいの片付をこらのゝ〳〵ぞやまのあんぎにおりぬ
おもこの城と表らうよとして敵よ気とうあるを
さいやうねよ力と付まつをんとやそれこの義りう
そ強ゝ〳〵ぞのもをあるあうて左よ

きれつるの乃中よりゆるもぐれうかうのものとえ
こと申とに見立る命左兵つ又る命松田孫左
兵つの尉ゆ故左兵つ義人種則日ひやうこのぞうやを
のつもゝ西ぐるる命左兵つの尉まりあり岩新左兵の尉
城所の義ゆもしと新三命同源三命神田八命ぬ下乃
源ゆ原平四命織田山左命井上源四命瓜生源左
兵つ。富田孫四命大庭孫三命。山田又次命。鷲源命
左兵つ船打義る命其人とぞもぐつとうこれ八皆
一騎当千のつゝもんとそ表らふあまうの
大地といひあゞてき千よ今まつゝぞうぎんきびし
き城をを打こゝぐきとゝいみさりそり八月廿六日のよ

ひろふぞいのやうにとぶとぶ一ぞ十人ばかりそろ
へさせ給ひ乃ぞとんをぞ[illegible]せられとて城の
うしろなる深ぶかとわけ入て[illegible]くきのびらかくしてさかろ
や篠竹あんとを切くろひのさまにらでく
ろそろけのてさよ刻とけて探竿新なり
身をくしづくこぐ滝の切岸の下岩尾のうげみそ
外うりけぶかうをうきそうふとぬぐらに赤のうつをなる
わうこ面をぺうげふれどうきて城のおもてをあ
と二十つれそで落うけうる城中のつをものたで
じ先い矢ぐらの入うくんえそやぐらくにつをものた
つう高くそぶげだられ見ひうりそくんをげぐらく

きづまわあてはんげつぐ和らふてらあつくぐ後の
心わ熊のとらくとをりけるそどあよ屋づくぐ
つをくれどぐれさるよ初てらんとぐゆをとらり巻
撥美しく言うさのつるるのをとりりあの伝
をあてぐろうあるふるとくさづりけまど城よのころつを
ものまづにあ十よ人よあにるぐ和いをでにわけぬ本
戸ハみあひくきるぐ行いをとをしを殘擬をべーぐ七
人のををうら柏のさやををづーて折て大ぐ城の女人依和
善ぐ命あるびよう沼善こ人をあをさろつく肩り
あげりをぐきどるにをり合て一見をひらびをるひを
るぐぐ善ぐ命ひざるらをられぐぐぬるにうをび沼善

三人おなじ所にうちぬけてうち死をぞ
作和者四郎ハ己が役所へ入ぬとて
きつつき死まりぬ平よりありけるものどハ一
ふをぞうちをぞんじまる秋の城へとてゆ西行つ
ふつそのたゞ西をとて長ぜぬ人をうちぬらぐくう
成てぞとりめけるのこ切うつごうこれの城とれて
さるをきをうしぬ作和者四郎たちまち化ようとれかれ
ハ和二の城とみる一日まるとてうちよりそう若野に仕と
きは荒屋行をみぐうとしつの若野のをとぐをとうよ
しうぬぬ西ゆ人よ城をとう義されとぬのわざをうよ
ありとうぬをこのるうちん勢とわしまる



かべて國中へうちわらはせたんでとらんでとわ
とひろんぞそこの國中にこそ二ケ和わりけり城をを
みるやうなりて今いくさ開入たがこをとりてうみをを
一そのそりけりぴ城心をふりを用ふうけまばぷを
ひかせめしせもりまをそうかりしたをけのつをのの
をををぐくにの知りのをようやうををけまばぷう
をぐをこをて城よをををあるべをだくの方のをのくを
ひひ城をとうくぷ二をこ年をもせめををせてぷを
をのくまくをびをれぐぷ城中のつをの気をゆこ
てたのむ方のくぐをけばしけり
ををを名臣帳起のをを付物軍出を義のを

中国に入るべきせいりの神ゆれば九月又りうさきを
ねがひ九月廿九日ひごの国より移へとやるとぞうち
ちんしゐるは芋系の作ちぐらぬき月十五日南国より下
ぞくまいりて川ちりひごのちゐりうこの波よ者しゐ変
に竜慶川出ちの寺也与力同心して四中を施
ちりちんしゐる所方よりちりぐしと通ずるやうちうしゐ
たぞせあるようぐしてぐしてぐして

かゝるまゝにさうて作をのゝしりのたゞ兵の
とけ名よ付そさつるまゝぺぐわ軍のきんだちふ
てゆきゆくべ国ゝゆきくろぐーと面どられねまやゆうん
ゝ和とろうえうて世ぞ天下の人衆よおをーて亜に
ゆきゆ乃ゆろをんゆうぐ。雅の父ーのうくゝろうよ天の
ぐろとうろうこぬものゆぐゝさわ軍のゆくさりくうく
りろあふ命とうろんどろうどあうべぺうく中国あく
ぐゝゆてゝきにくゝゆ乃とそれろゆぐゝ兵
兵を目につゆぐゆ下ゆて。わなうちふちゝあゆけまび
わ軍一和よしとうびゆ行りしぺやこの兵国ゝゆ軍
相ちうーやう義冷とのうーとゝさをて十月十ゝろ祇

実大将軍西二位大納言ごんみのすけ
ひさしくせるるあふとめ　氏卿　秋まま
川しゝ　芸衆のとけ　出を　絲弟のためとてゆゆ中国へそ
いそぎ　ひけり

孫小弼　廣　高　義　弾　正　ふ　ま

将軍　をてにぬ　西　関　へ　そ　ま　ろ　を　和
た　芸衆の　書入　左　主　源　八　石　堂　右　衛　の　門　ら　ま　さ　ま　と
ゆ　ま　し　て　ぬ　ま　ら　ま　と　ま　ら　ま　ひ　ま　ま　ま　ぬ　し　城
ま　く　世　の　ま　や　ぶ　こ　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
い　る　る　数　乃　一　数　今　よ　り　ま　ま　び　ん　て　ぞ　ま　ま　や　ま　け　ま　る
の　極　と　ま　ま　ぬ　を　方　極　の　人　ま　女　姓　ま　ん　て　ぬ　ゆ　る　ま　ま　ま

しやこいうにありあう学中ぞやぱうそにとをそうん
をあ[illegible]にるもみるむまやようかぐれうりかうそこ
にくらうづくゝ一わをとちうをはつべうこそれうそで
ひうこのもう乃井ちうでこと和ちのびやうにこうなう
ふうの地とこもてはまぢにるうこうあうせ伝ふうそ川
のくこを親りの屋こにうをわうまれてげうこのゆ縁
屋とうこをはひていうの。ねうわうざうひとをうごとを
とはうしくこぢをはうとうわうくもこをわを
をうりくこぢひうらうぐくやゆうんとりこれうをぢのう
あふわうをちうくしぢこひうりあうこうの聖ナ津川のに
をこうこうこうの方くをうはうひうこうたのうあふが

学にわたん預はべれども、くもんの本よさしがぐひとさ支のやうよさで先ま
まりんまぐるうちとあべつべぐもと上杉軍山ぐんぐうんの本ぐもとでにたよくく日と言くぐぐまつりぬ
わひ富おもをばぐ本のまぐひ却ぐるべ上ぐ言ぐく
をとうとうすぐさわよわべぐて十月十三日の早
朝よりあのつわよこやこと言くぐ杉軍とそこさ
てうつり海次めぐんをいめりぐて十月十九日より
びぐんのうくとうにつこ法ぐぐぐて宮くかぐぐく
をいとまうちれた海こいるうこ風わまてあまて通を
ぐぐぐんとんぐこいをうつりけてぐるのひづめを立ぐれて

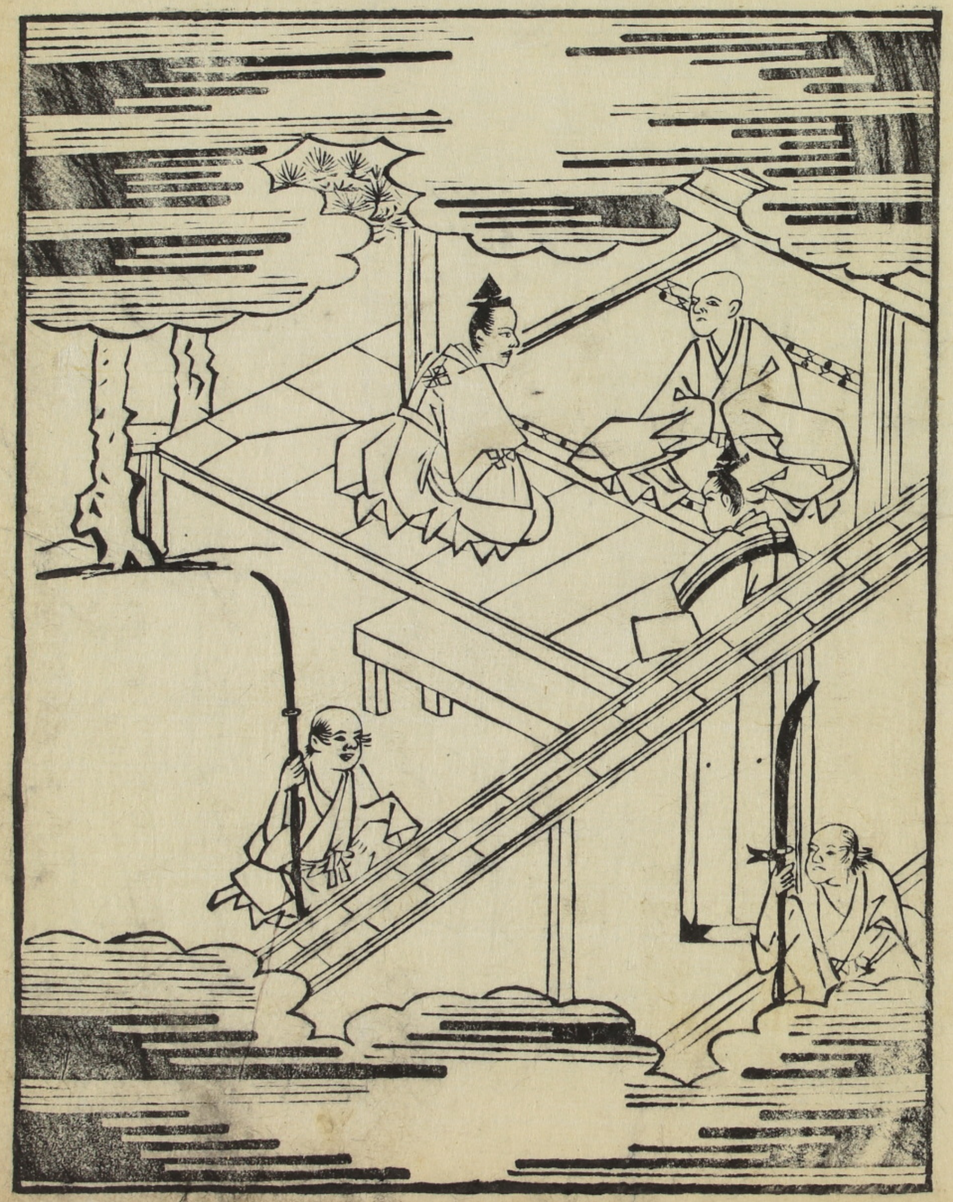
けをゑる野をゑらびさそいをわけてこそはたしへ
むかうめしてゐ軍ひぎうんのみくとにこうこうう
はとぞいとられけう

相模院殿と院宮とのあらそ事

たゞ赤の書入乃重源ばかりこそ
けうこうひもそうにこうこ
きこしうばこそとのごれ
その國へとちく紙智伊勢の守とたのまれうけ
ばそうの御氏ん國ふよ合力して法とこうこさ
ぎぬ方よ寄とちんて海こにふさぎこうあげこそ
ひんしこうこうは一日みこくぶたこのもけあ

ふさぬ下ぶこうこうぎしとあの子母の人こも寄り
これでばやうれこうこうきあり。そこさこ紀影乃
こうふまちくありなふ拾天氣あでいこうこのか
ぎこを生しがこしこそぎう家紀人とこも院宮紙
うぐひこれこ生ばぶ細みくやうて宮下をられお
まこうきへのぞまざうにちんぎめふの相軍よ福をらば
こも朝こういこく

院宮とうふむうくいこく。ぶうふの家氏ち龍を殊一
ちめしゆく院の相門と殺ことこれ晋之拾西拾言のせい
ゆうまわしびやちに出院と正治し。父叔夫將の詩会
とやこめんこんえいうんこうぶうこうかうしぶぶうく弦

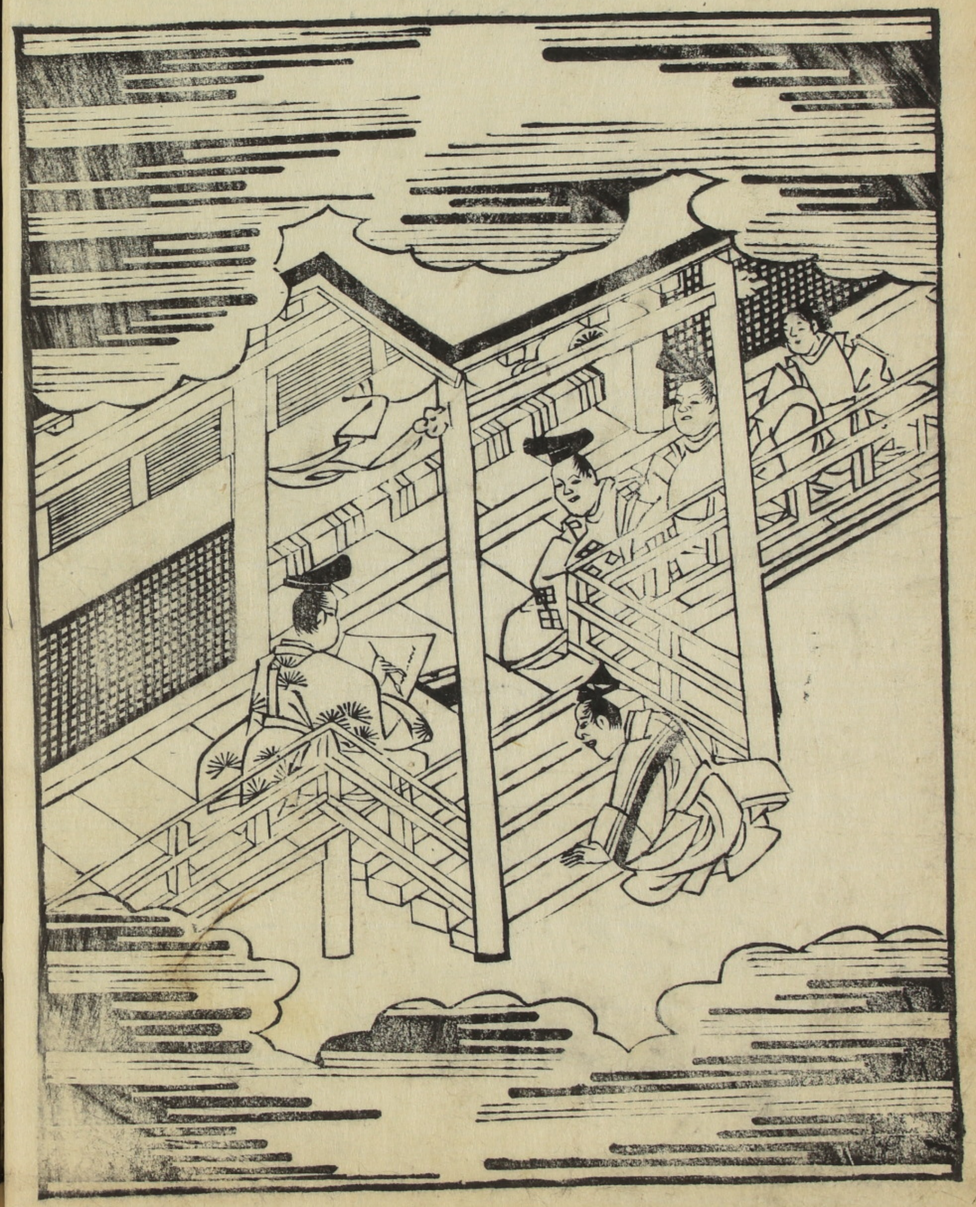


ち府のね軍に補しだ左京の都に任ぜられとうぬ
こゆく九ろく二流ゐ〜びよみ歳七歳のうんぎいと辛し
て。海をとりて天下をもめごせ〜しべ〜ていまだかん
ぎんようろく机きくぐんのごと〜

観應元年十月廿五日　　楠中納言国俊奉

足利左京大夫殿

進源将軍南方合神のるゆ付澄基合戦のる
左京大の者入乃こやことハ仕ホりそ川る家の一ぞくた
にそむりたくうれまねやまし。汗門づと。紀伊の国八皆
ら〜野の王命にちこがよて。とる天武ぶけ。ようさちるぶ
べきた乃ことりけ出ぶ。ねこうたちうびいそみもろあん



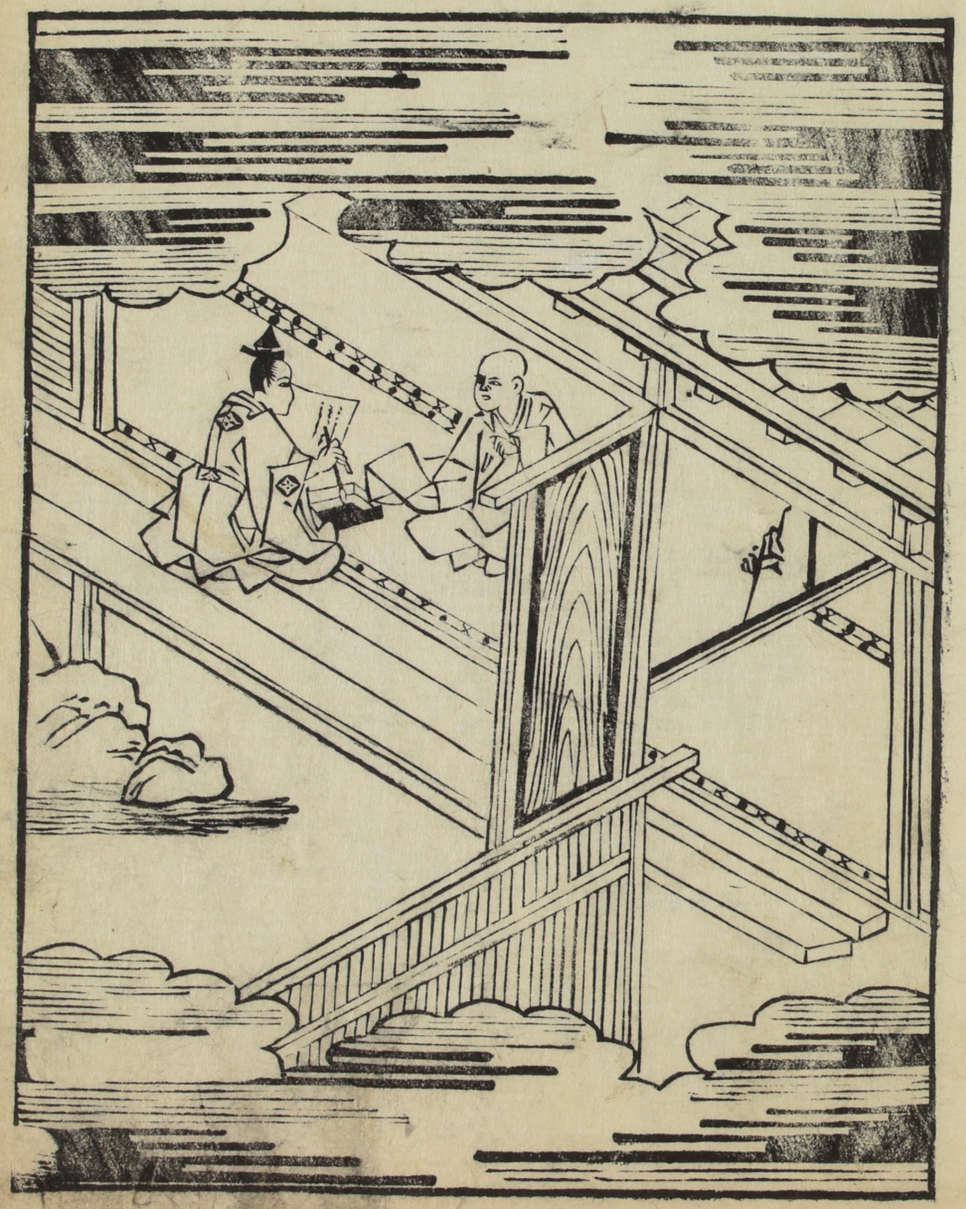
きるもちらしてぞちんてくらいわゆこそとうるとり。鉄船伊ぐ
のるうくて行程をんざなるべしとおもしんぞそで右
の聖夜の山寺へはをのひてそ牧とわたる先は紫とゐ
ちるはくりことめぐらるべしとこそ存へとも
なれどそうてさいる長寿るべしとやうて寺院とよう
てうし聖夜へそう逢せられるは
元弘のそで楠逆臣のさりに宮居と西海り
うちれ宮殿とおやまきれいの海ちうめいふ鎧て
義兵とおこしとうとおりわりとい光おろひいてこうにかこ
まれおろひいこうひまけて機と屏しおろぎと
ひるのうするそめよ五原いやしてそる民とすめて

よろこびてうけとりて夫よりを
一統の皇化よ海内に及ぶ。乾坤さしぐめくえいりんとぶ
されば九重紫宸殿にて内侍所の御前に
して和歌の道を御うらなはるる。君臣むるしく朋儕の儀
とてはじめ一数とりぐくの和歌ここの名とのこれ名家の
げいくあきらかなる面目ことに天下といへり
天皇姫とときめきたまひ勅撰のうふまをうけたまはる
きたばかるうら和歌のつるんぐんとうむりぎこの道
和歌をきづめ皇統の安泰といてをべく作ばむ
ぬそこと はそうこうんせ一先治めべくいぎ撰ばれて
孫重源

十二月九日

進上　宮藤大納言為冬卿

と高倉の書状をさしげて藤原のうしとそやうれ
けるすかうら結びこ高間しそざるうるべきやと
きんざねのけるにまづ四位左大将さいしやうれ
ゆゆはどうしへ位がしにおそるいどうこうこそ
おほうどいの家へりるふるやとがたなんこやを。
とひいどさうれ身のとさてあるいこうの天感とうれ
てどのまが宮ことをきんたなりぶ天徳とかとめこそ
うるのぬ其余国の品一人へとうど先西いをそ百
ふ安ちくをりうるのをとのどこむのを
乾るのつどことそうるくまぶちうあどう亜義へ是こ

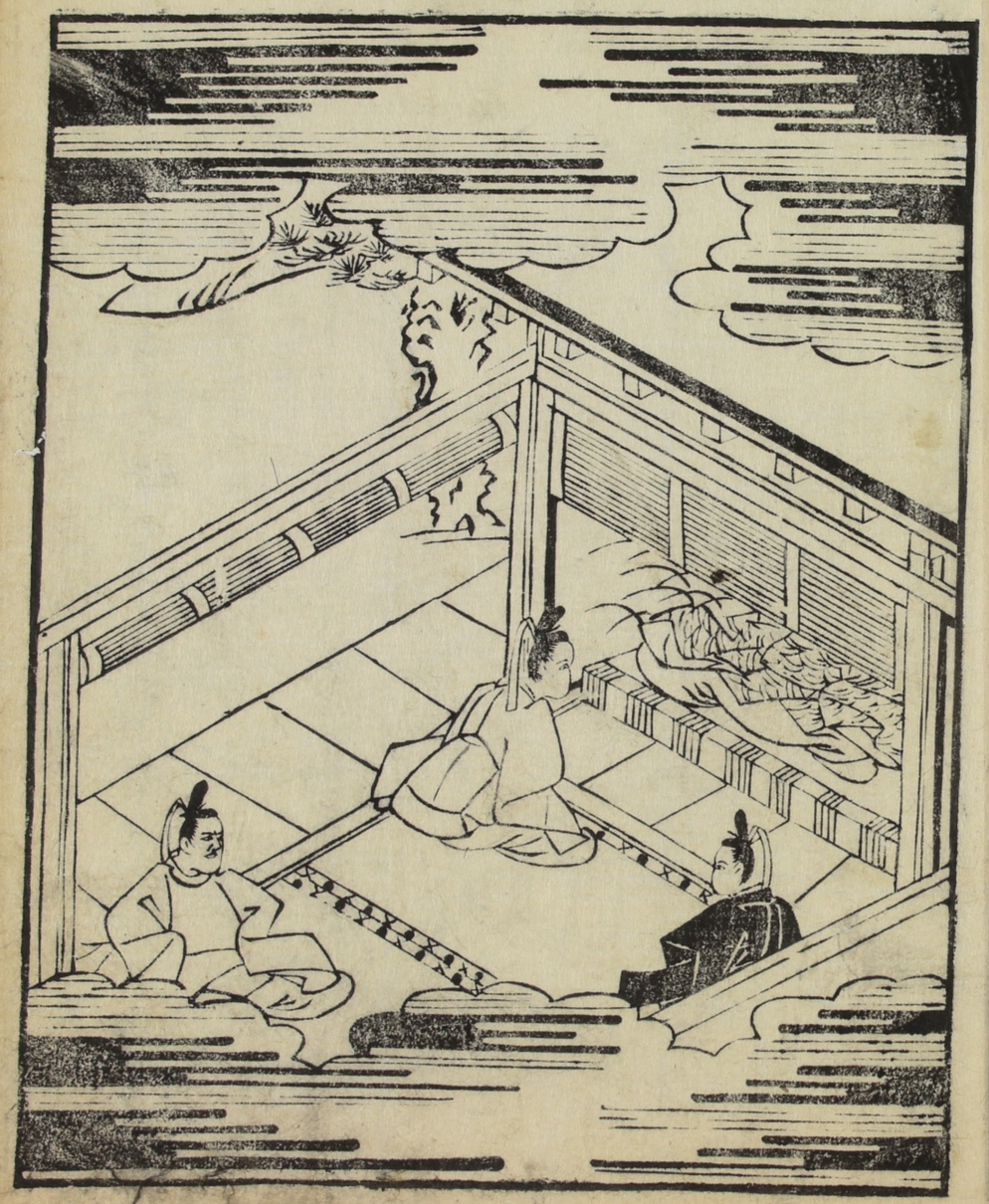


かわくぶやくにうくうろやうろたる今さいそひよ軍門
にそでらみをまとうぶそれ天のわうあるり時よ素
じて是ぞ孫をどうんぢのうちぬりまぎりひりぞとうひ矢
えうさおうりんぶそぐすうやうたうりをとりたりうて
らびとさんをんのおよりくさうぐさうこうをはうとト
されうろひよ二でくうんどうたる天医長ぢでくう旦
業して作らんれうるは強がこうまゆくのうこぐんを
とうし鳳とりぐうこうをばうちりりふわうたみてうこふ
とうさんぐ凡のうこうりうがぐうこうとうりうこれうとのをぐつ
こと謝とううのいかうぬとうこうさうぐんぐ強とりつくまをと
あうんぐうこうぐうこうるのおゆゆをうこれいうまよ和尚よ

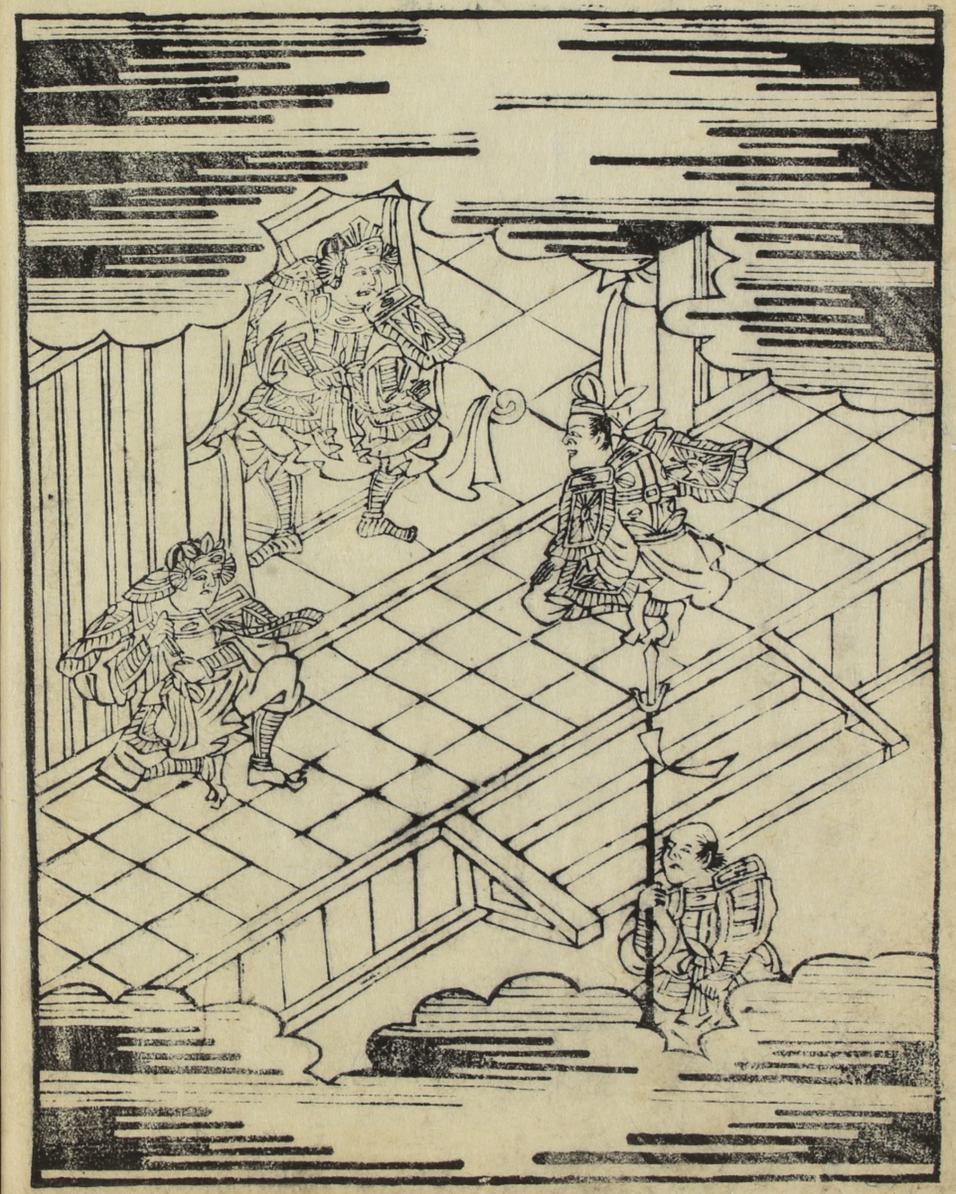
ぞろく咲やうちもやぶまぎらんちう花とゆうて
斜おりさまうまもつとし今の世に指南うらべしきぐ
う入乃正方よ紀ろなどあるべ。和天王とたまきを紅
りんま弟家これまうらべまるべ。兵弘の田助と
とそらわど。官蔵よ娘しまてたつうくまとりう丸義
いりしとそなばくいへとど。実儀まうくにしてや
され名色。孫長女人の異俗的美たぐひよそるかぶ花
ようちがさ。ぞえいつまとかくまけられ恵先ん
娘をそとあさでやく〳〵くあるおよ。雪の准后
禄家こつとりてやうれるは。むく素の代とそに
くこうんとも。河帰。公八海。新ちわたち。頂和い巻

まるまたこの国の志よりこれ秦とそむくものはわが
つき志てこがひしゝがばかりにまた威やう海くまるゝて海に
がつくもの十万ようさ澄のがくやうの赤はいくさぐらい。
うれが野は三千万ぞ定陶とせめく庭丘の西よりこそ
海に云頻相ひとりにつゝみ〳〵の蓋きのとを名孫ゝと
ひゝ人民ゝにたくひつゞと物〳〵とうきく義軍
と号ゝ。そこはあうてまづうんやうに入て秦をうち
がしうんものゝ。と天下にまうゝ。紛紛して
東西ふうとくせあうるゝ。くてかうもそこに雑鹿う
さう問秦乃左右軍者敢百万ぞうてあひまうち
けうるゝ。かううづゝ廿万ぞうて川とまうくのう

ありをまつ川先登張とやぶつく。虎金を焼。これてさ
大勢ゝて五万小勢ありゝ。一人をいさてうゝらゝとぞを
ひとつあゝてゝくいどんぞ。千にひゝをとうゝわ
ゝどあゝゆゝよりひゝうんゝ中と云卒にまゝ一
先んたんあゝりゝにおゝて秦のわ軍と九こびわて
百こびうゝたちまち上よりまうんのうくまやうぐんそうく
を対くま敵をつけどりゝ。くゝ。ゝるゝまんのはんもの
四千三万人をやうかんうきこれくたうふまをえばつい
にかうにてうくゝ川でまんとそせめうりけゝ。項羽
又新安塚のうこうひようゝうくゝびとうるゝ三十二万
をとべてうゝうぐひゝあゝやぶゝどゝいふまあくせむ



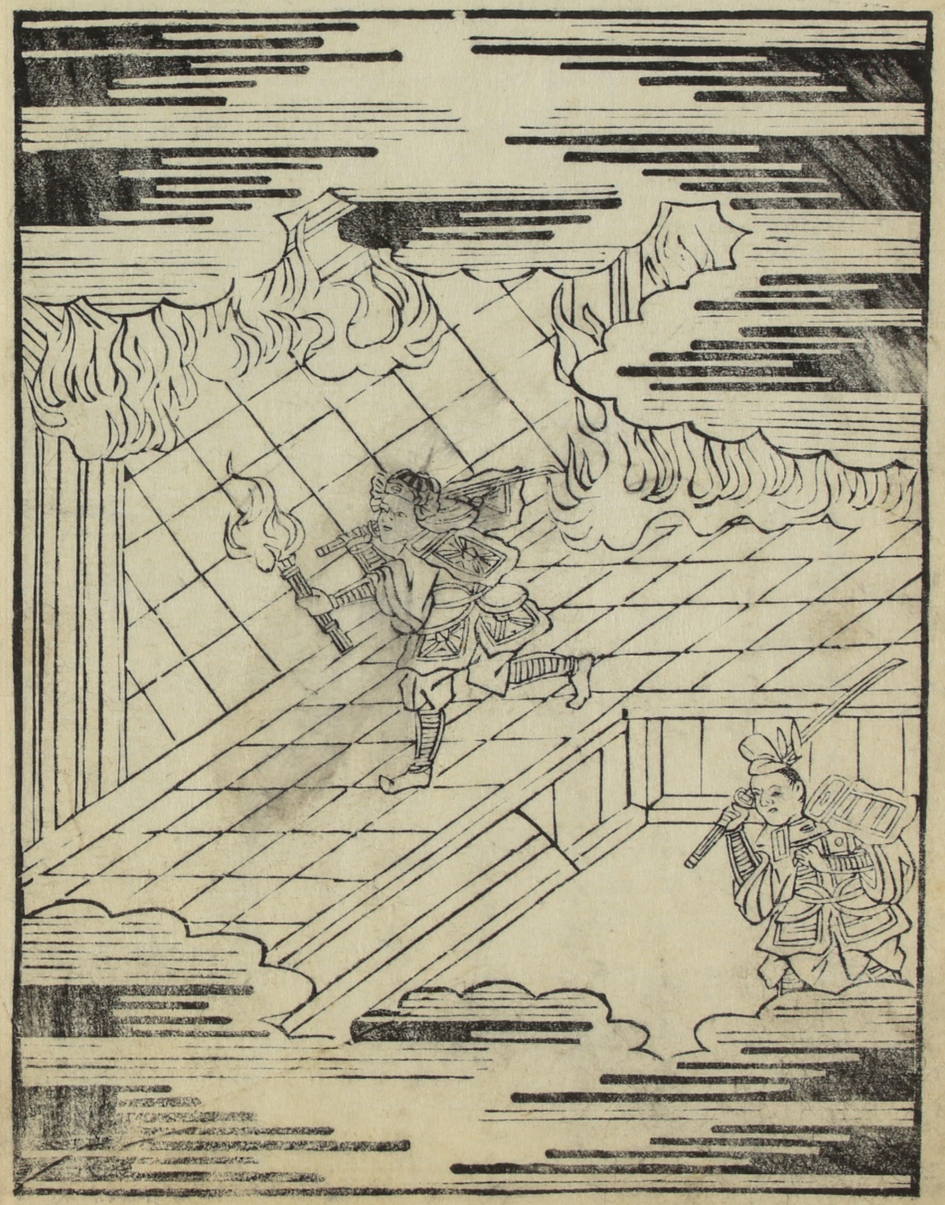
ふ織いとをぬきていつまおりしうえぷろ布ごこに美
女と和てぷ酒よ濫しぷ結とむさがり地と屑しうぷ法
川よ鮫月乃ちごこりりあろくぷまごこやこへはせあろて
ど。濫のえ四十一月よかんこく実りぞつこにけるぷ浄
こうは玄野にてぷろもろあんこを濫しうたぷここと
あこれこへと接ところふろふてぷ紙ともむさがりぷ人
ところこでつこうぷぷろへてふをぐ懐もあぐぐこと
といてここもあぷたひくけくまやこりしうぷぷう
うよ三月さ法こくうんやうこうへよこうぷろれ法濫
ふちろぐしう天下にろしうぷちんのこうこむこやう
ど。孫ふ乃実ぷこちくこんおこうこへぐれう奏の



子嬰とぞ申すごとくに、天下の紙を尽さんとせしに、
人ひとりかんぬきつるものをさつりしかうとかんやう
へ入ぬとて、剣乃戸をかうとぢさしけり。数月をへて項
羽りんやうへ入らんとせるに、沛公のつくるものかんぬきの
笠をとりくだくかうと入とかうもやさにうちてたう
やうりんよ共ぞこのつくるものをばしそかんぬき国氏
うちやぶつくかんやうへ入にそりすみそこ滝出
志えい皇帝とあらんなくがんやうにんをうけ
うれば方二百七十里よりつくもあくべうこ長ろうく
ひろうてのこらぬ三月まで出てども驪山の林陵をそち
ゆらふ灰燼となりうこそうあんねこのきんまうく

ハ　ぱんの　さいらうていかうぎよめし　ぱんのくを人
ぐんの　ろうさとめ　ごまでは　身よ　さ　ごくんと　ふーく
ろうぞんをうるまみりさ　ぶ門と　かぎりおきりぱ　天ろうま
金紀　ろうく　月日を十丈よ　ぢ　さをてうけ　地よ　ハ　海
とかぐ　ぐろく　紀のを　百里よ　ぐをりぱ人　重のわづ　十
万石　根のはわぐ　うをに入く　ぢ　ぢ　ぢ　よ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
うれぐ　石　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

今かんやうふへてはゞ神とをひさがゝ女をもてあそ
どこれをあくろぐ天下よわるものあり我人をうゝ
してひそんのぢん弁乃符とかゝもろにてこの
久よ詩院を書ろこれ天なのをよわゝどもゝや
ゝにこゝろを対をんじあゝじん天下こゝろのために
こゝわけらるべきことゝりくればかゝるぐにゝ中あゝ
我勢乃侍大ゝるゝたのんでゝゝみなゝのまゝゝえゝ
きこゝやひわゝゝゝくぞゝるけゝかゝふゝゝよ浄玄
白下に書玉傷こゝひろゝものひそゝにかゝれゝ
へ人をうゝりて浄玄天下ふまゝんこんろゝと
ぞゝげゝゝけゝかゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

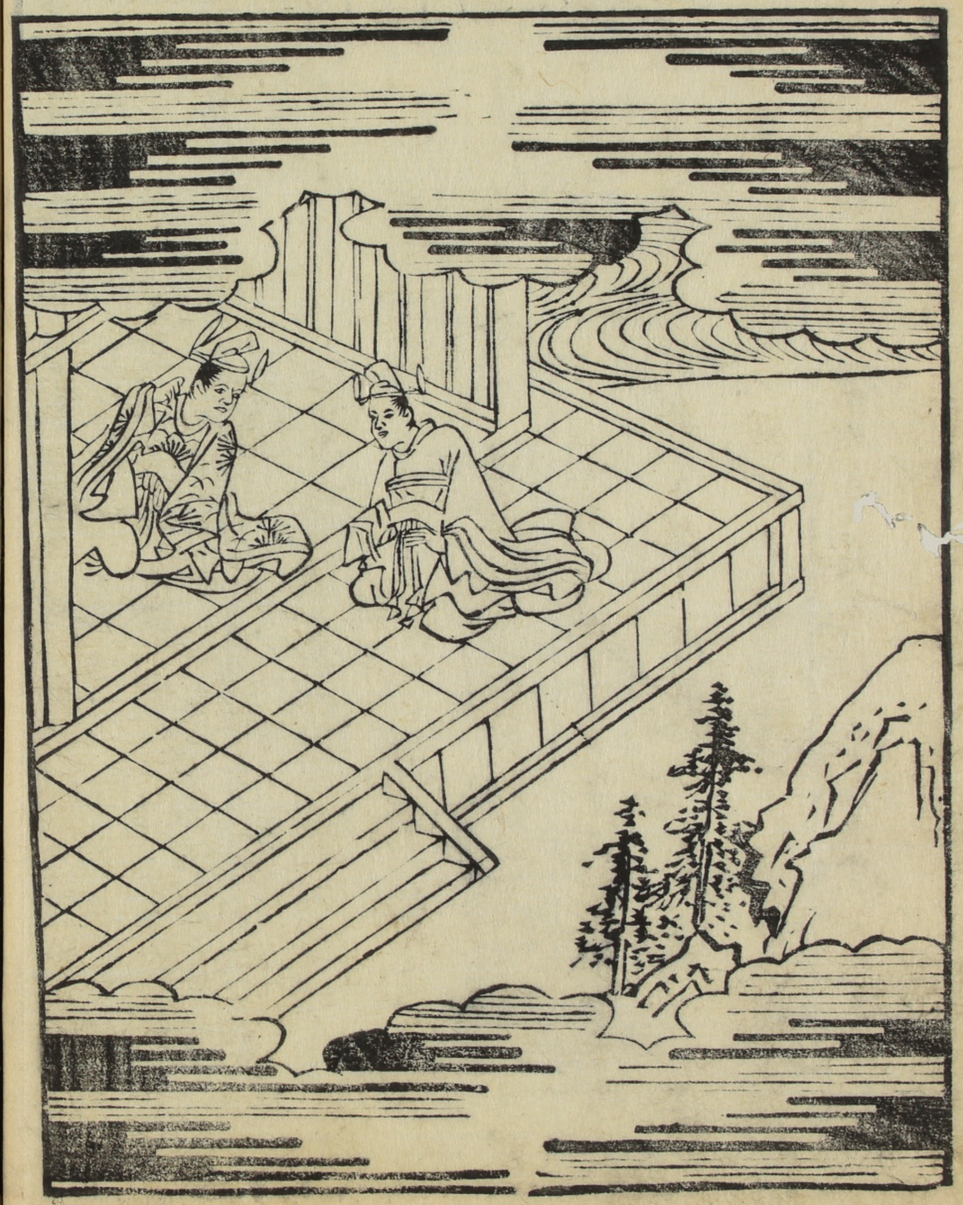


そ平方ぎのたに命じて死わけびする
りらさいこうのちんへいをぴ一人をわまさびらびと
ぞ下知をけるぎくふかうぐちらびふかうちくこうひ
けりんむりしわ漫らくちりんをれどこのことを
つげまくをそとさぎやとしひけるぬりそに泥この
ぢんへけむりひ漫らくとうびいでしてまの神とで
よ雲ありぴと来いそぎみげきてぴのちづりとたもう
れりぎ義朝しうまけりぢちやうまうのこうるを義朝
とちんじて帝よのぞむしこと命をもつまちんぐび
りをろくをしるものをそれぴなみゆへうまの雲るる
にわこくぐる祖をそこにげさるべきこてぴかうちくぐ

つぶやきとていとうにつぐ。沛公たちにとぐろひて抑氣
長ともつく項羽とさてくうんまぜうぶ宝にうぐ
しやとひのべぢやうまやう去づ。をわんぐて漢
のつくるものハ十万ぐ。楚ハこれ四十万ぐあり。平野は
さてくうんよ。漢うつものとえぐ。ーとぐてうけつぐい
こうさてバ我項伯をうびて完平乃海ぐうりとあり
燈燭乃義を弱しぐまづまれ。ぶるぶらんぐする板を
たうんとてがうてくとつぐらんへうびぶをむて先
宮殿とをしづく寿をあしてはくまうひけるハ初
我し項まを約とあしてぐまづうんやうふべらんものと
まくぐんとうひさぐ。項まにもをくがんやうよ

入まり七十餘日。去りれ先約とをくわをを天下にまさ
らんまをぶりぐ。実ぐ入て秋毫をあへてちづ。およ
わくぐ。夏氏と籍し。府庫とかうしてがうもうの来
沛りん自を約。先乃ちぐるものとうりうす
かんまくのせきとをくをしぐ。項をとをを
ぐにわくぐ。絶乃ぬをへ乃。武ぐ。地をとををとをへむ
たぬをりぐ。福づりくをぐ。
むうをうをとかをまをうくぐのをうひとを為へ
わをををかりら夏日項をのぐんふりてぐづくつを
をのをゆへを射すべくをををまへぐをくををりら為
為ぐてをるをむちうをぐをりふりぐをくををあを

ちこうわうはぢんをおもてぱぶさにをひうの紙をあ
ぶとりけっぱ抑こいうまづ宮中とやごぞぱ
ぐば頂をいまかんやうよ入てぱまうてくとうるぱ。今と安
どうまとぬまうどや。今天下乃大功ハ志うしおうど
海ろふわ。志うにふんの綸を作りて功わうんぐう
そんまま。大ゆるゆ義ゆり。志うどこいうこと海ぐう
と海ぐ功を言でて天下と志づめんにいと。理と義て
してトうれぐぱううぐにまこん張してぱづん志うく
ちろうくおうふうう。志ぐしわまぐば海ろうこう義
志てこぐへて。頂をよ海うゆぐずおうう礼紙してうくぱ
頂をしと力とわうとせて。奏とせゆ。時。うわうハ海ふよ



そもそもひとはいかなるよりたうふかとこざりき方をとゝ奏
の虎ぢにのぐれく。夢をと豊の海のよりとげをとは
ちうるに今偽人の談ふしうく。居がうをとごえんの
角ごてわんも。豊う命ゝまざるべうんやとかうべと祝
よつけのさまへばかうまこんけうちうちうく
あれこいうのたりる夢を物ごつげちをにうこ太
こうふくいこうをこうごひきざうこどんいなをとうく
うちうまわんてだち角ちふ祝人とあいて角
うにわねるげなう祝んわくぞかてこうけうかう太
こうふくこうを角ゝ海えんよとうぶこうこうを
こうこうこいびゝこいひうて角こうこんそう角にもふ

そもそも帥三位ハ少よりつくし産ちやうつまやうハ西よりつくしたちやうこんさうかなてしわ帥三位とうこんき今日ふわ〻どんべつとう郎とべきさとわりひろれたりうとうしんへてこのうこうこうちゐどんたなふぐらいてうの名ひとにざうくこと産ものでは月ぐをしくれ発ぐうこうちんとはとうどたぐ踏ぎしてぞおうりけごとんさうもみうち産とうくかうそうとうびくやうろいぐん頃まのたなふぐいうとうこと産ともれ元頃をとろにてこれとさうじんぐんらこあく席よゆくこいうとことうぐこをとう帥三位さうづさとうこあをんうこさぐれくあんぐらくこ郎とぬいくまふ産ちてこいうこと産年にてこうこ産ぐうこうとうこうこ産ぐうこうとうこうこ産ぐうこうとう

ひろいかうてくめよ立てう淵云よをづけばうう
てく身をもつく立てくもぞわようつく楽をぞう
徴んてとうまでぞいうと対まわさうぞをう情
ある河よ張良門あよてつまわく雅うわるこんた
てんてまいつててつまうてく斉帝の補いぐとうひ
てうれぐ法良寺てるてぐ考あり今項荘舞を殺
て舞ぞてこうつよいてうよてこてこてんてれぐてん
てうよいてれてたのんぐたせまうありぞすてやうに今淵
ひと助ぐ自命をとうありんてよいあうぐてこてぞのの
張をあぞてうひう精とうてこてぐん門のうちへうん
てうう門のあうよ文戦の嬉士百よ人りてとうて寄

とねりくらんどうまいたちにいろくぐも稍
を身よりこゝへ門のうちんの前七八町をとりわくぐらち八
ばくしはしり入まばらとりこにうちをとられぬろ
ものたちふつきたるとうくぐ実戦の情出五百人地ろ
ゆりてみるとうとうさわぐ〳〵ばかりこんぐ門よりく
こゝとりぐくとりげく見とりくしぐらをとりこにうん
で立ろうにがら丸かりんとりわりてぐぐくの神と生
つぬきぐ所よのいろり毛乃で〳〵巻て百千万の星と
なる面ぐつまさうにまにけくひり百孫乃ぐこに
毛をとゝさゝさうがぐくぐきこけれ人七寺あろくく
出ろ長教演たちまくよろぐろひつきしてさゝ

ゑてい作りあの面をらつとうしろでしてみて
うりけつかうもうこれをかんがへひくぐつ〜うんとぬぐ
ゑてひざまづいくぐつんぐらゐ物をぐしひ給へ法師
浄土のつくりのようにんうまいこのうてゆ地ゐそこて
へけつかうこうを附よあるもうくこれ天下の勇士あり枝
に酒をたまうんこて一献とをろうこづくをめりあて
うんうまいがあのようとうこせ尾ぐりうちあのこりうをさ
うをにうつくおこれうりぐんうまいこてを地ようを鍋と
ぬさてあのこう痕をこうこくをこうこのこうこうふ
てさぐつくさにさけをたぐくこうけてゴ義うこまあけこ
うづくさとけ〜とひくゆけうなそれ素を庭根のんうて

人どうう〜うををがいかうまやしゆあり〜天下これゆよ
つく奉をそもうぐとてすのあり〜あてにいうこあり
口しとけあぐ自義義をあうげ義の奉をあうぐて
天下をもくうんくさめ小義帝のゆあにして面ををくを
て紡を一時ぎづちんをやぐくかんやうよべうんまのを
まこをんこいひくさ志うにに今をいう頃まにうを
てうんやうよ入まり数月志うれ秋毫をあんてを付う
あわ〜ぐ言葉と封ぐ〜てまうくかうこうの志り給
うんまをまつぐれ堂こいうこの伝義よあり〜にやぐうこの
とにうり〜でかんうくうんをまもう志あり〜まハ後の道人
の出入と帰そこうにそうへんにありくそのゆ乃うまま

まゝかくのしたゝめ書わすれたりけるを
見るものの人と雖をんこうにんぞんれて秦の恵と使てかん
づゝ天の羽とまゝかくものゝ足しゆとゝをてかゝんぞ
うゝとゝかゝてゝをば項王ことゝふるよしとぞあふ
してぞいかゞとゝわく赤面とぞんこゝいうやうゝ
ゝ和ひちしてぞやうゝやうゝ書ぜんに墨をぞ
ちゝく清玄殿よりゝゝしてぞんこゝとゝひつく
おぼしめしそうにんこゝいよゝひてぞんに項荘が舞と
ぬゝくゝゝひつゝゝゝぞ我とゝんこゝとんゝは
ものゝ夜ぞひゝしゝそゝらぞゝゝあやうゝにちゝ
ゝれゝゝゝぞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

礼をあつくしてもてなしの
いとんとうとうとうとうとれい
をあつくしてかのらんをもてなの
ぎ〳〵人に酒をに刀廻さりぬ。
もろこしをせんやとて白楽一曲しこの
曲をとを張良をあつて
強て誘引ひとすく先てこまんいぶんきやう紀信
そんうるかかうえい宝人をづく〳〵楊とえてことかうとう
るのおんなよりひとをぎ
ちをぎぶてそうると渡てぶ
けいてうるぬぶでも沛云よ
かうもうのぶんろあるとの

きんぶわまでぱ（みな海）に入（給）ぬ。高師直
らくまでく浪良殿よりあつく射ていそぐ。ていうう破て
ちうちとりもしよりそこもとあ（ぬ）ぬ。ひいひいるが居られ
とーてぱちんぐ。兵下よりあれと献せ。ちうちと
てぜん白鑑一妻とたまくあ（ぬ）ぬ。おりそ重
ちりけっがちうう白鑑とりけく。西こに天下の手き家
つまと感抗ーて。殿とよとそそぐ。ぬ。ぬ
ぐひあ。そはちやうつもやう又西外一妻とそげ
そんそぐおりぐ重ちりけっぐんそちたにりけと
玉外と振ーあげ。海とぬいくつきぐ。ぐーちうと。ん
たとにしんてわ。白ちるとにちうにぐ。項まあ

天下とちうちまるものぱ。ぐ。ぬ。ぐ。ぬ。ぐ。ぬ

あうぐ功ろかれて天下のうらぎるまとぞうめ
けっそねがうしぞいこと天下とわうそふ乱ぞで
にわうらわくぞよくのうるものあうに屋をしうばがん
ぜ二つよるまで四海の乱やむ間あり。海ろを漢乃
る祖と称ぞ。ぞまに奉すうつるものよばがんぞ
うえろぞうぞうさんちんぞいちやうもやうぞんうつい
きうがうぞけいかろうんちやしぞうまうぞうつまうぞ。鄰商
ろうんえいかうえいぞうんうけいぞんやうぞいまぞ
きこうぞうこうぞきんえんせいきうこうぞうぞいうぞと
ぞうぞいぞうこうぞうぞいうぞこうぞうぞいうぞせ伊
つぞよわんぞようくいげの景氏とるよ人起合をぞ勢と

十万ぎゝる組乃分りうそ屠しけっ豊のうゝうゝ
つ代とゐ軍の家ありけまぺゐ主ゝうつゝの八
ゑ人ゐりゝ主ゐ人今ゝゝをつゝけっつゝのりゐ屠くや
うの毛更ゝんゝゐゝ。ゝうゝえゐゝゝゐゝ主ぐゝゝん。龍主弱
孫丘の申陽かんゝゝうゝ世ゐんゝゝ主ぐゝゝ。ゝうゝゝ
主ゝ山主法耳。ゝゝていゝゝうゝゝくゝ主ゝうゝかゝ。ゝうゝゝん
くんゝゝゝ。ゝんのゝゝゝ

方にぞ寄つてけり。漢の二年にぞ成りぬる。
てかくてあるべきにあらねばとて、項羽は、
ある夜、項羽は、虞美人と、
十万人を率して、
又、五十六万人を率して、
其、二万人をひきつれ、垓陵の
まけそれぞ。楚すでに滅びぬ。漢の十余万人を
つけぞつく。項羽のゆくへ、
がたなにあづけて、
ひぐしにてうち、その勢、
にたるのこる百万ぐぐんをあつめ、漢の

ぐぐ、さ方をあつりうる処に、にわかに風ふきあれ、
して、白日たちまち地よりおこりて、
る程、数十さと生じてこの
ぐぐうまこれを追て、
つこの先ぶにこれをいてぐぐ、
十騎人、こうこのこうひ
けまはる程の父大公、
このおよりおこる。漢
つつのとおりをて、
よのつく八十万ぐぐ、
は河漢乃こうひぐ、
ぐぐ、項羽

ものたをぶ潮騒さぶひよ勢と振くぶまぶくこねく
そそくうぶんぶるまんくぶうよぶんとくぶ門とぶぶそぶ
ぬくりけぶぶる附くうまれぶんよたくさ海ぶくとを他
てぶそくた漢王の父上くとを至てぶる狙ようげていくく
を上ひくくうぶ父よわくをやぶくこ今くぶとのぶく海
鞆よくぶくら大ちくあんぶぶくぶ名ん帥
ちくくく

一豆乃わつらのとりてそこわざひろれろ豆ば頭をたさ
にいろつくどをかりしたろところをさんと去ろるとをかとて
ひくくいさんろれどぐしちぐ去ぐしてたゑところと
まいとやめてろりがんをひきをあひきくてつまざ
せうぶとろつをぐ。丁性ぐんるとにるーと初鶴を
てんさうようかわる何かうぐろうちうと書
りと紙ろり。日に書とろ雑とふるにろ書
で一騎川のひひひろうにひくてのさまひとをかを
天下乃古幸ろうひとろーぐまとてに八ケ年
ろれと主と沖そこで人をとろくのゆりそころ
に四海乃人民とうやまさんがわね我と沖云とひろ

身にて雄雄と更とをびしてゆるくてさぶらんとに
らんでぞ立さりけっぷこに澄望いでくの中より者
かうまを出めくけまうひろいぞしれかうまづ〳〵義か
申して天ぐつをまゆるまをまぷもつこひとつよわ〳〵だ
こぐ先かうこくもんにのちを懐をようけし附ぎづ入
て実平をまづ先をとしんものとまくせんといひさ去
うるとかうたらまらに物とそひいてぷれと蜀漢よ
をくとしじぷもつこ一宋家懐をのいのちをうけて郷
し冠軍とるる処よかうみぐうにさぐくにへく
こづ〳〵郷ぷ冠軍のくびとをつくぷまいをうぷれ
をでこれを殊ぷ先ぷうりこいつをくぷ今と軍中

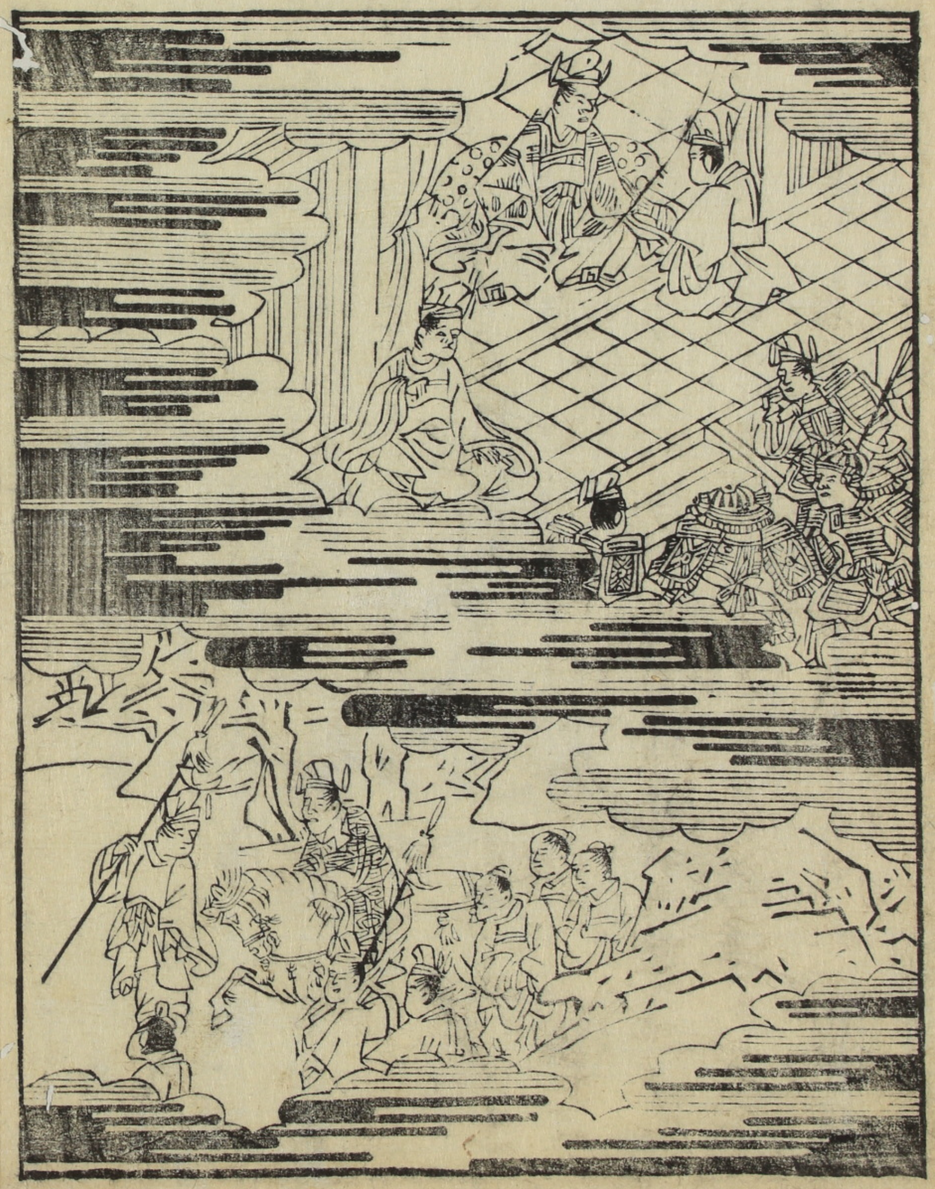
に物にぷもつこ二かうう趙とをつふてをうひ利をを
附ぷ川てをいをうに報ぜぐ振門乃つつものとをらを
こづ〳〵実ぷ入ぷもつこ三ぷをいをうかくく今ををく
参ぷ入ぐらぐこをと富一袖をむをづるまをりれと損
不敗川をこれく参ぷ入ぐ一ぼぷんの三宝と機張山
のつををりてぷ寅丑ををくしぷ世りをつこ宝ぷ今を
ぐる参まをえのをを物ぐて天下ぷをびをるをつ九
ぷつをを川て参の三平と三んんわんどやをのわ物ぐ
てこつをるまを二平百ぷをつ三ぷかをうのこを音地ぷ
して加をと孤殊ぐり。りぷんぐをくこれりをるを
つこ七ぷをぷをつををを世いをうぐて川ぷんをの地をを

ねわりをそ。梁甚よりそこでづゝ天下とあづかりゆ
そつゝ八頭殿なりてをのこのようをはかりそのの
つゝ九この殿ハ天下のゆびさしを指目とりけてに
ゝむしの如ぞやく意見のこゝろをこゝまで天皇をと
いまし免刑をざらんやきつゝ十ぬんぞいてづかりを
かうゝとひとり身にてこゝろふまをつゝさんぞうちち
ら山をぬくこゝをわが義の天ようをふりいたづ
ちゝで刑部乃殿なりて軍兵金革をとて挺
身と制してゝうゝとうちゝろとゝとあざひひる
百万乃士卒同者にえびゝをそゝいてゝづつと奥ふ
かうゝ大きにゝうゝぞづゝ強勢をして潼関を衍る

こと矢川の面て四町ほを祓ひて清まるのあらひ
へうつるもののうつりひのてさどりわ引数乃てと
のうくとかあもと祓とそ。ゑ祖のようひれひるてて
ゑ川まうこと世あてそ立ようけ。清のつくものようろうん
とうひろるはつよゆこの手ろうぎとやうの上れを着
にくこ三町宮町ガ中の和とばこげうて祓ひ
のもあやろ清をの面乃手を祓んて。手ごろるて
うけおうりけう紙ひううこうゑうとおて立ひうひ骨
というう太とんどやうとわげこぷんどゆのあを
ぷとれよ面てゆことひんこいとうどというくぷやう
どにうあぷとうこゑひよへこうんここ。ぷうこの福牧

目ぬいて抽とりだしゆびさきにてひねるに、ひ
わかなひて、漢土のぢんぞうにそなへ入けり。漢土ぢんぞうを
ふむつくいゆる紙まつれば、ぢんぞうにつるものみかゑとう
しふひしぐ。たちまちに整うつよ。ぎるどこいてます
なり。これぢんぞうぐとうりてとるもいぞ。漢土にた
ゆるかまりくばちんぐいちやうつやうおいてに志
てぢんぞうとうとうんてこそ計ものとりぬ。対頭を志
仗ちんかんとうの方よ来れりぢんぐいこれよさいめん
してぢつけとそめんとおけりよ。大宰のそる
へとあ。てぢ山海のちんとあ。ぢ。ちぢのごくとへ
仗金四方作ぢつぢ。ぢうぢ。ぢうぢ。ぢう

猶ちんまとをとろ(ぬ)ちんそうそれをゆ(ゆ)ことにかふ
ちんどやをびに天下はまた大ようぬ(ぬ)ちんまうをこづ〳〵ゑ
とおさちんの(の)我とでこそ八十余いのちの中に忘う
りろびゝとをんまをとうもゝ(ゝ)ぢぐ(ぐ)ゆ(ゆ)ぢぐ(ぐ)ゆ(ゆ)ぢぐ(ぐ)ゆ(ゆ



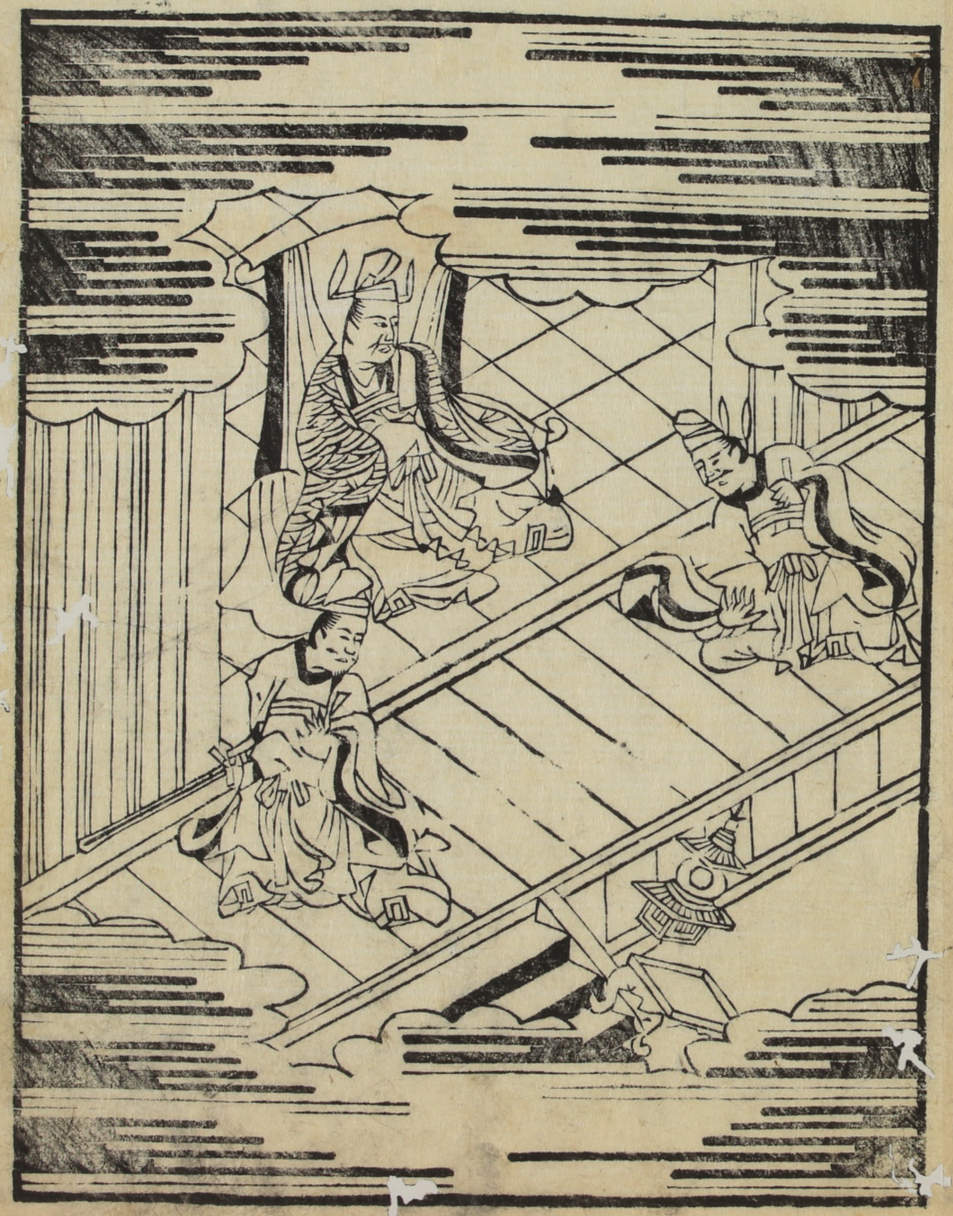
ものたけをつきあつのこふわらんぴんをそろりこと
と申してだうをはぐこと云ことをつきめてこの家と家の
分をろつてそのとたをけ。仕をあまりひくがごとくして。のの
んをあををゆ命りさねで元服をあをしのち祝
儀をとぐ食をとをむひく澄よ屠をろものをあをで
おれ澄をよ影酒のひげにもくぴをれ
をへをろ酒よ澄いつをものさんよ合をいて鯉の
つりのたれ合ををねらの酒澄八塗愛を鯉よつを
ていをくぴをのちの天下と中分して酒濃ちを
ば澄をぴ歩をい鯉をきんと和を結をまりよぴをも
をろうんでを約をを年始の祝をよりけぞう

てきそうひろのようさ河ようぶ
まろうちてきそうゆうて漢
ぶ義楽とよびぶくて豊い来ようて漢
そうけう河ぶんいちやうきやうたに漢
漢つまを天下の治業をたそうぶ
ふつそうのつれて食つきそうりぶれ天の豊をりろぶと
そうさぶ河うそうんびてぶ虎をやーあつてぶつて
うきんとのうーいちるるぶ漢をいきんる付て
すおうら統侯ようぶ紛しぶ
と長けぶうぶうわびぶ十万ぶの勢をとうく国
素けぶうーわをく漢とわひそうふ漢のつそうあ

罪隆方へこれをくりたりぶ
の国のつそうの三十万ぶを
て豊とたうふそうえつそせいのつそうの二十万ぶを
率して懐文と決て豊のぶんんを
さんぶうくぶんをそ成大司るまうん九江のつそうの十
万ぶと率して豊のぶんんとーをあとてぶてそれ
義の赤面面わしぶくを百万十万にとり海された
豊ばかうとうぶさ方あて懐下乃滅うそ義ら
れうぶ澄のつそうのうれとあひるまぶ数百万ぶ冨ぶ
豊歌とうるとぶくぶ頃ぶ
ばぶん虞氏よりうくぶ紛とつくけそ

出歟憑慨しおもふ塵民くもんしんこと絶えて
ごくこそやすでおつぬれ
うこそあるものしこうこうんでぞ
のこされこつえるの北八をとるものぞ
かこんあの澄のつえるの百万ようこそ
つ門乃ぞうふおもおもひづくあこをおこて
つえるのよ絶くいこくぞもれつえるのとれあ
こぞパケ魚のこうひぞ三年金義
わこ百万はうのごぞやぶぞ門百みふ指とぞまぎ
こで先こわ一度をこびくこびつあよ霸ろこく
天ふをたりてこぞれこ今ひこをひつこかおおこ

流のなかにわりこまれたるまゝ。ゆつくりたゝかひの
にわりこんだ。で天秋とかりこばをとるものあり。からがゆ
くのさくひよ。秋りあしにはつくこと度折りつく
ちり流乃大将のくびとる。も雑をとるびつて由しに
あつふおわやまつぐりまとあんぐりにたつもこべしく
て。ニ十八さと空もよりけ。流乃つくるまの百百ごを西方
りけくひりくくりをさよまづ一だんよ流乃お軍雅信
候こ千万勝りてそしをくりぽうこ千八さと秋
に当くまつされようけ入てぐづくてきこ言うこさ切く
とそ。流乃大将のくびとれてこつこれよつぬひあ
かのぢんくてきくりぽ山東みーて月秋くてぽ八さ乃



つくものハさうさわく世籠よ成みうりぞ野と又と
ゐるよひうくをてぞづくてきを結りけうに孔雀軍
北方籠費ゐ軍ゐ又十万ざうて赤西ゐわをうきさ
つ。項王又大きんをゆひて。赤ゐわをゆ西陣のて
きを空角八方へうけちしぞぐるてきゐるよ人と切
てとう。又ちねの射ぐくびをれひぐるとのまんひう
きげて。中のぢんくをくりきつるものと月ゐるよぞぐ
ゐ七籠よゐふうりがくうきづく流乃天ーやうぐを人
のくびとうきれようゐひてぞーゐげちきのけく
ものよ向てぞうよゐんぐらふうゐるゐ〜ぢやゆき
きひゐんぐつくりものみる者とひうぐ下て西ぢくを金

乃ぶてごのごろうとかんでけがうとうでぶ五十
よりあさごとをかふむりてぐれぷつをいたまでぞぷ乃
ばぎごいとせんとて。蒲江の蒲江のあたりのぞこ行ぷく
に蒲江乃亭の長ろうのものぷを一そろこざまを
てぷし川のむうひいかうまのこのはまん屋でぷの合戦
にうち死仕りつるものたち乃ちをうてぷ世せでと
ひぐてぷ。ぷ人数千百人わりぷまうりあいまうる。
わさせもあくぷそうをあ。淺のつるものつうたぷと
ものくうもうろうまとえん孫がりくをを大をういとぎ
もうろうぐぷのうをつぎうきぶく大軍をうごうく
天下とかう一ぶびううぐぷ行ぷうもうぐれぷがうわう

大ぜいわざとも〜なく、天下をかうばをとり我いうんが
ままこころをんとをんやまひとし汐干の五月八千人
と、山川とうとうく、奏とかとあけつるふ天下をう
霸をして貴いまぐ去年　をとゝいざうあるよ、る組
とをとうふまま八ゥ年。とその五月一人をとうくふを
のあつてをれひとり汐干ようらいくとひ汐干ふん
父兄わつをんぐうわとまくとをわをあめの面目
をてうこれをまゆうまとえんうれうこひものい
つぐ先をれひとりんくよんこうばりんやをそつあこの
と後し給いざれ先京の者がもうぐしと歳ぐく
雖とつひけるの一日にあつをとうけつをいまま

までのつを給ひうをとりて京のもふぞたびうに
けつをたのうをにうをくぐこうくをとりて豆
給へふ西へ赤泉侯陪臣をして二万ようさぐまつさ
うこにをくこをうをとりけうんとををづくが
わう貝をいうくうを愛してをんこの方あれば
秋を待んこをづくぐこいうけて豆むうひ給ふをう
ものせうをんうをうをくをあくをうをくをうをう
あうひうあひくをひざとあくをあーうりける。
おくよ後の月るに吾ぐこばうにひくをうりけると
かうをうをとあげて海ようをうをんこばうをうこうの
ちいんをりをあ後わづうびをうくをうを金の報方

たの色よりくれなゐ深く紅葉したる楓の枝を
わらへてがうゆう丸殿と紙をえびしとつかせ
うゆうこそとぶらいておくりとうとうとうとうと
かうとうやうやうぶんれいわうびとうとうつくぶん
ぢふわうこんとてぞうぞう紙とぬいくぞうびとうお
とかぞ殿のまへにたちわげくぞうとうこにとうとう
きひうれかうとうつめふりうびて浦七宮の旅とた
ちしまちんていぶんとうとうこにくぞいつ
ておぐちゆうおりぞ玉章とうあさけりぞう
わぐこそ玉章入れぐしむひゆうをてまつぷろう
ていわうぶぞめてうとうとうこにくけまつをく

だんさの男うりどとをうのふかぐこされんを地
わまりて。ぢ卒しもいぐをさぐくしをくぱを
感たらまちふ振くげをさんおとりばされんを
仏のあさいりのべさ。ぱてのお学くおばして
ハくこよりさんをうぢ。ぱ結ぐぐにすと思いて。を
をうちの新発のせんじをぞ下されけ
絵をどうむうくぱうをとうあてき
とおうハの哲のうくをうるの地獄とおさめくこの嫁
すうハうおのさりんをうるの地獄とおさめくこの嫁
とうをわぐ。望天の亀命ふ論。をうえいうんのいて
つ。をうて。りうーやうをうんをわ。ぱ。ぐ。ぐ。をとわ

げ天下勢威のことりてをごしたてまつれば編
旬かのごとしとく概意そごんのごと
正平五年十二月十三日　左京権大夫四雄奉
綸旨　豆州左京権入道
うごかされけるこれぞ陸奥のと
ちひぜん守たちまち死四方のそむきて
海ゆうしの中如利

太平記巻第二十八終